

1. 泉区の概況とまちづくりの課題

(1) 泉区のなりたちと概況

1) これまでの泉区

泉区は水田の多い農村地帯でしたが、戦後の住宅開発とともに人口の増加が進み、現在では農地と住宅の共存する約15万人の都市となっています。

①農村地帯から住宅地への移行

●昭和初期まで 「境川や和泉川、阿久和川などの河川地域に開けた農村地帯として発展」

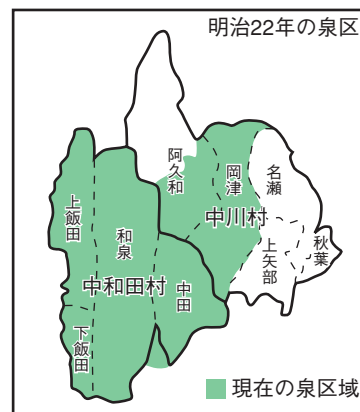
泉区は、境川や和泉川、阿久和川などの川を中心として発展し、平安時代の末頃から水田が作られるようになり、その後は水田の多い農村地帯として発展してきました。

明治時代以降は、多くの農家で養蚕業が盛んに行われましたが、関東大震災と糸価の暴落によって衰退しました。

●昭和14年～ 「横浜市に編入されて戸塚区となり、人口増加が進む」

昭和14年には、中川村、中和田村などが鎌倉郡から横浜市に編入し、戸塚区となりました。

この頃から、軍需品の生産に伴う工場の新設と社宅の建設によって、人口の増加が進みました。戦争の末期に疎開者を受け入れたことも、人口増加の要因となりました。



●昭和26年～ 「横浜伊勢原線（長後街道）沿線におけるスプロール開発*の進行」

昭和26年以降は戸塚駅周辺で工場立地が進むなど、都市化が進展し、昭和35年頃から横浜伊勢原線（長後街道）沿線ではスプロール開発*が進行しました。

●昭和51年～ 「相鉄いずみ野線の開通による計画的な沿線開発の進行」

昭和51年、相鉄いずみ野線が二俣川駅からいずみ野駅まで開通しました。鉄道の開通に伴って土地区画整理事業による計画的なまちづくりが行われ、人口の増加が進みました。

●昭和61年～ 「戸塚区が戸塚・泉・栄の3区に分区し、泉区が誕生」

人口の増加や市街地の拡大のため、昭和61年に戸塚区が戸塚・泉・栄の3区に分かれ、現在の泉区が誕生しました。

区名は泉が湧き出るように、若い活力を生み出しながら発展するようにとの願いから「泉区」と名付けられました。

●平成2年～ 「様々な施設の充実による生活利便性の向上」

平成2年には相鉄いずみ野線がいずみ中央駅まで延伸され、その後は行政施設などが次々に建てられ、生活の利便性が向上しました。

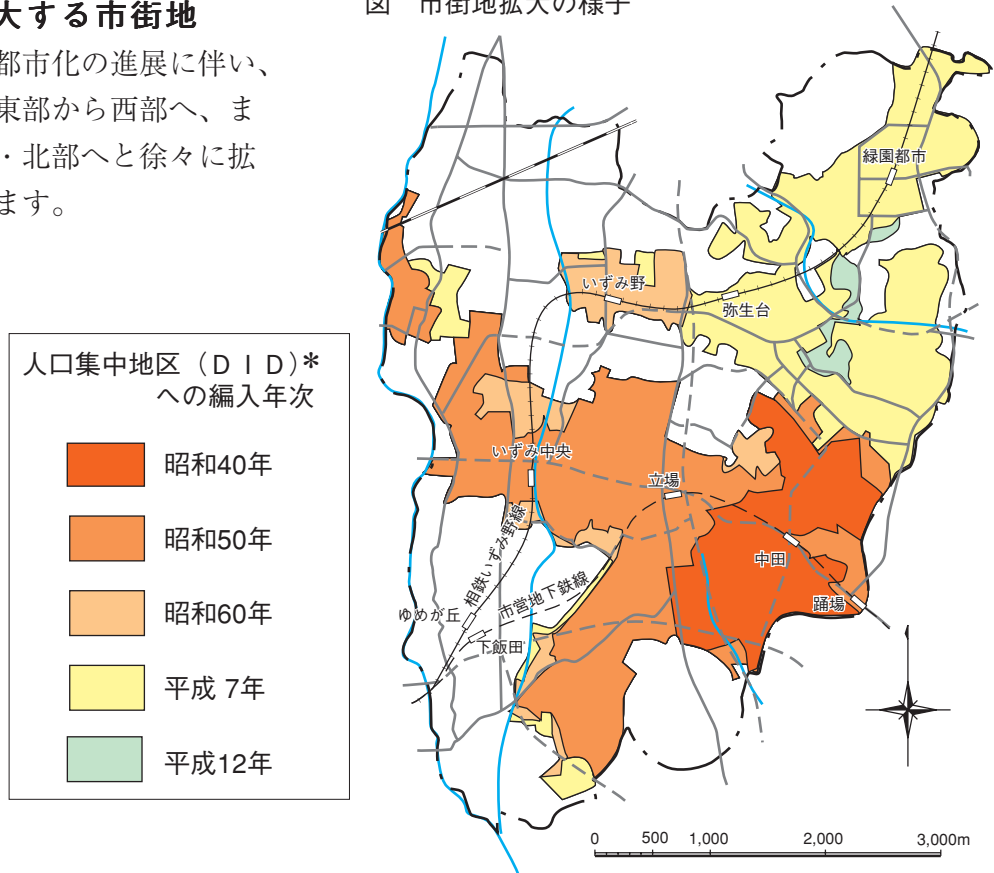
●平成11年～ 「相鉄いずみ野線と市営地下鉄線の延伸」

平成11年には相鉄いずみ野線と市営地下鉄線が相次いで湘南台駅まで延伸され、東西方向のアクセスが向上しました。

②次第に拡大する市街地

戦後の都市化の進展に伴い、市街地は東部から西部へ、また、南部・北部へと徐々に拡大しています。

図 市街地拡大の様子

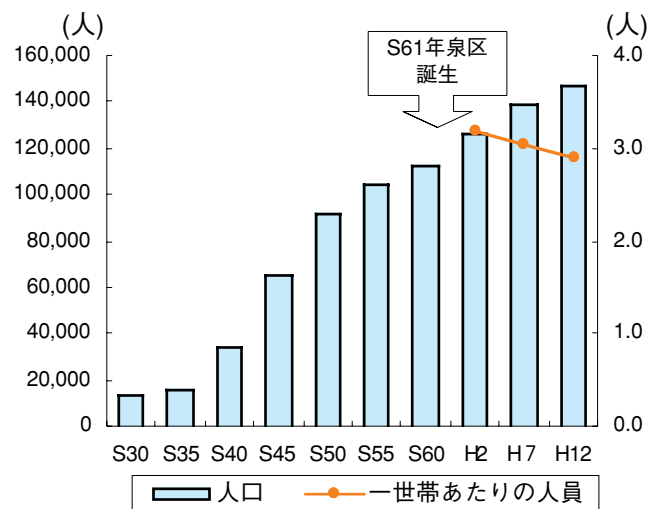


③人口は45年間で約10倍

平成12年現在の泉区の人口は約147,000人となっており、昭和61年の泉区誕生から16年間で約1.3倍、昭和30年からの45年間で約10倍となっています。

一世帯あたりの人員は、減少傾向にあります。市内では最も高い2.90人となっています。

図 人口及び世帯数の推移



資料：国勢調査

2) 現在の泉区

泉区は、水とみどりの多い住宅都市を形成しています。

産業においては、市内で農地面積が最も大きいなど、農業が盛んな地域となっています。

交通においては、鉄道利便性が高い一方で、道路整備の遅れが課題となっています。

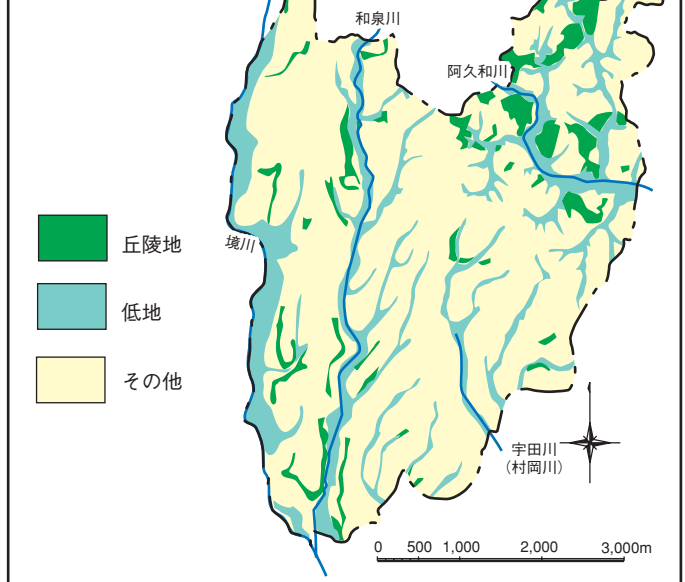
区内には、福祉施設が多数立地しています。

①豊かな水環境となだらかな地形

区内には境川と、その支川である和泉川、阿久和川、宇田川（村岡川^注）が流れており、なだらかな地形に段丘を形成しています。また、地下水脈にも恵まれ、市内有数の湧水を持っています。

注) 皇国地誌によると、泉区域を流れる宇田川を村岡川と呼んでいます。

図 地形区分



資料：平成13年3月横浜市地域環境特性図

②様々なみどりが多く存在

泉区には樹林地や農地などのみどりが多く残っており、緑被率*は41.9%(平成13年9月現在)と、市内で2番目に高くなっています。

公園は区内に91か所(平成16年3月現在)ありますが、総合公園*等の規模の大きな公園は整備されていません。

市の制度である、ふれあいの樹林*は区内に3か所指定されています。

図 公園・緑地の現況

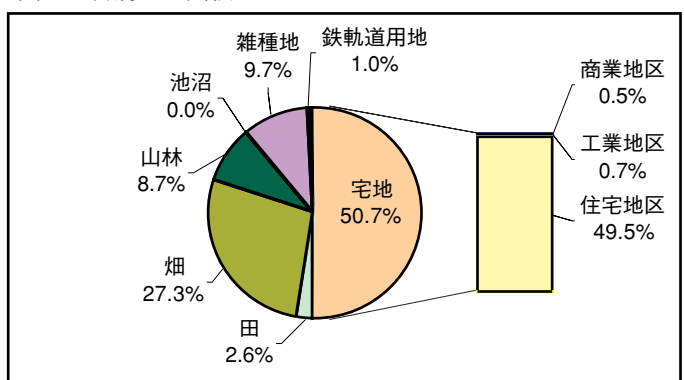


資料：平成15年1月横浜市公園緑地配置図、平成13年3月横浜市地域環境特性図

③土地利用は自然と住宅が中心

固定資産税課税対象となる評価面積は、区全域の約7割に相当していますが、山林や田、畑といった自然的土地利用が約4割を占めています。また、約半分が宅地で、そのうちの98%が住宅地区となっています。

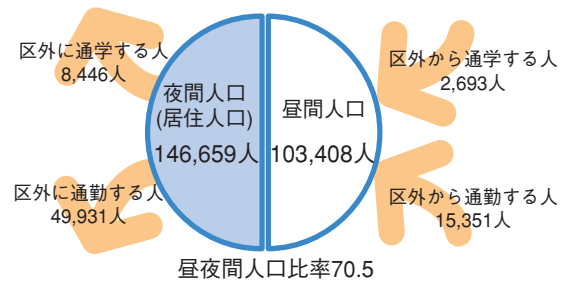
図 地目別土地面積



資料：平成15年1月財政局

④昼夜間人口比率*の最も低い住宅都市

昼夜間人口比率*は18区で最も低く、区外に通勤・通学する人口に対して、区内に通勤・通学してくる人口が少ない住宅都市であると言えます。



資料：平成12年国勢調査

⑤農地面積が最も大きい泉区

産業構造は、市全体に対する従業者の割合で見ると、第二次産業、第三次産業が2%台なのに対して、第一次産業が9.8%となっています。

泉区は市内18区のうち、農地面積は1番目、農業就業人口は2番目、農家数は4番目となっているなど、市内でも農業の盛んな地域です。

表 産業別従業者数

単位：人

	横浜市	泉区	市全体に対する割合
総数	1,347,684	31,372	2.3%
第一次産業	696	68	9.8%
第二次産業	281,529	7,889	2.8%
第三次産業	1,065,459	23,415	2.2%

資料：平成13年事業所統計

表 農地面積、農家数等

	横浜市	泉区
農地面積 (ha)	3,475	485
農業就業人口 (人)	7,502	957
農家数 (戸)	4,693	496

資料：平成15年1月財政局、2000年世界農林業センサス

⑥鉄道利便性と道路整備の遅れ

区内には相鉄いずみ野線と市営地下鉄線が整備されています。鉄道駅は、相鉄いずみ野線の駅が5駅、市営地下鉄線の駅が4駅、合わせて9駅となっており、鉄道の利便性が高くなっています。

区内の都市計画道路*の整備率は約40%であり、横浜市の平均約60%と比較すると整備率が低い状況です。

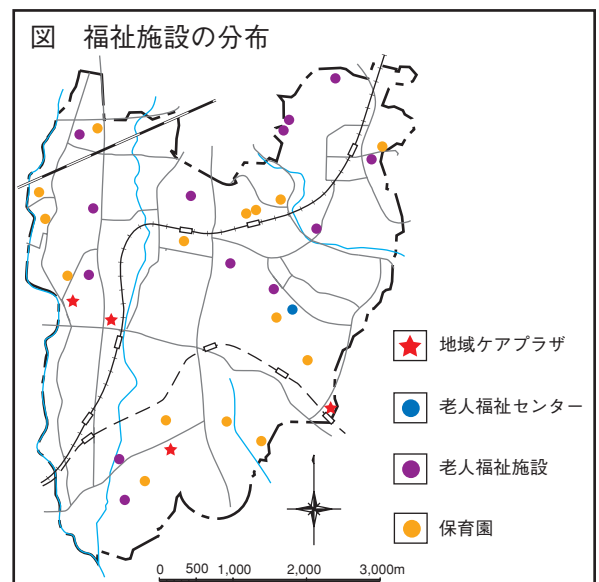
表 都市計画道路の整備状況

	計画(km)	整備済(km)	整備率(%)
泉区	33.600	13.400	39.9
横浜市	688.910	414.500	60.2

資料：平成16年3月道路局

⑦充実した福祉施設

区内には、地域ケアプラザ*が4か所、老人福祉センターが1か所、老人福祉施設が13か所、保育園が15か所あるなど、福祉施設が充実しています。



資料：平成15年3月区民生活マップ

3) これからの泉区

これからの泉区においては、少子・高齢化やグローバル社会*の進展、ライフスタイルの変化など、様々な社会状況の変化への対応が求められます。

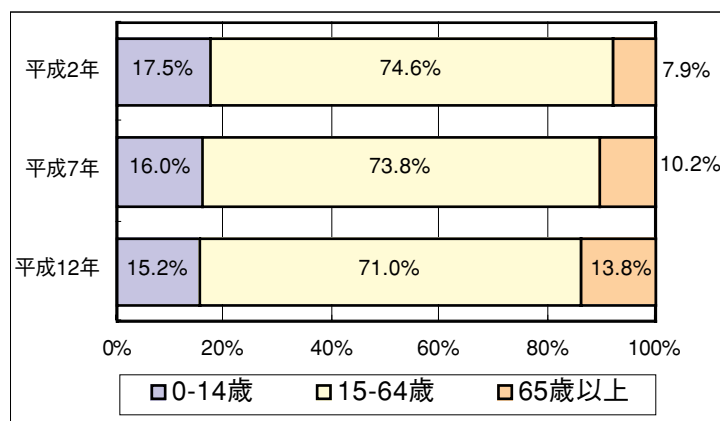
また、分権化*の進展に伴い、自主的・総合的な区行政が求められるとともに、区と区民との協働・連携が重要となっています。

①人口減少社会が到来する中で、今後も増加する人口

国立社会保障人口問題研究所*によると、我が国の人口は平成18年をピークに減少に転じると想定されます。これに対して横浜市（中期政策プラン*）では平成18年以降も人口が増加し、平成32年前後に人口のピークを迎えると想定されています。

また、過去の推移から今後も少子高齢化の進展が想定されます。

図 泉区の年齢別人口構成比の推移

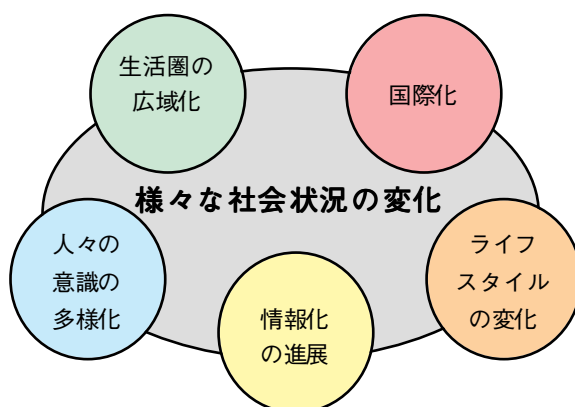


資料：国勢調査

②様々な社会状況の変化

人々の生活圏の広域化や国際化など、グローバル社会*が進展しています。

情報化の進展や人々の意識の多様化、ライフスタイルの変化など、社会の仕組みが変化しています。



③地方分権*の進展

地方分権*の進展により、横浜市の役割の拡大とともに、区の役割が大きくなると、自主的・総合的な区行政が求められます。また、地域特性を活かした区づくりを進めるため、区と区民の協働・連携が重要となっています。

(2) まちづくりの課題

1) うるおいのある居住環境の向上

泉区においてこれまで培われてきたうるおいのある環境は、泉区の特長であり、財産となっています。今後は、このような環境を維持・保全し、ゆとりのある居住環境の維持・向上に向けた取り組みが必要です。

● ゆとりのある居住環境の維持・向上

- ・ 泉区は全体的に静かでゆとりのある住宅地を形成しており、今後ともこのような居住環境の維持が求められます。また、公園や道路などの基盤整備が不十分な住宅地や計画的に整備された住宅地などにおいて、各々に美しいうるおいのある居住環境の維持・向上を図るための取り組みが必要です。

● 水やみどりなどの自然的環境の維持・保全

- ・ 豊かな水とみどりは、泉区の居住環境を形成する中で大きな役割を果たしています。そのため、河川や湧水などの豊かな水資源と共に、農地や樹林地などの自然的環境を維持・保全するための方策が求められています。

● 農業とくらしが共生したまちへの発展

- ・ 農村から徐々に都市へと発展した泉区では、現在、農業空間と住宅地が非常に近い場所で共存しています。今後もこのバランスを保ちつつ、農業と区民のくらしを共存から共生へと発展させるまちづくりが期待されています。

2) 交通利便性の向上など、これからのくらしやすさの形成

社会状況や人々の価値観が変化する中で、求められる「くらしやすさ」も変化しつつあります。今後は、時代の変化を展望しながら、区民のくらし方や働き方に対応したくらしやすさを形成することが求められます。

● 交通ネットワークの充実

- ・ 高齢化の進展や地球環境への配慮などの視点から、区民誰もが、また区域全体から快適に移動できる、円滑な交通ネットワークの形成が求められています。
- ・ 交通渋滞の解消や歩行者の安全確保に向け、幹線道路*の早期整備を行ない道路ネットワークを形成するとともに、鉄道とバスのアクセス向上などによる公共交通ネットワークを充実することが求められています。

● 安心、安全の向上

- ・ 日常生活において、誰もが安心して、健康的にくらせる環境づくりが求められるとともに、災害時に対する安全性や安心感の確保が求められています。また、子ども、高齢者、障害児・者、外国人など誰もがくらしやすいまちづくりやコミュニティの形成が求められています。

●時代に対応したくらしの基盤形成

- ・資源循環型社会*や情報ネットワーク社会、国際化社会、高齢化社会などへの変化が進んでいます。今後は、これらの社会変化に対応した都市基盤整備を充実するとともに、時代に応じた変化などに適宜対応できるまちづくりが求められます。
- ・高齢化社会におけるくらしやすいまちとして、身近な商業施設である商店街の活性化が求められています。

3) 将来を見据えた活力のあるまちの形成

多くの区民が「住み続けたい」という意向を持っています。この区民の意向に応えるためにも、長期的な視野を持ちながら「住み続けたい」と思われる魅力と活力のある都市を形成することが求められます。

●泉区の持つ地域資源の維持・活用

- ・豊かな水やみどりは泉区の地域資源であり、その中でも広い農地や大規模な空地は特に魅力的な資源です。今後は、長期的な視野を持ちながら、これらの資源を維持・活用する取り組みが必要です。
- ・泉区には、多様な人々が集まってくらしていますが、これらの人々を活用すれば、より魅力的なまちづくりを進められる可能性があります。また、将来を担う子どもたちを、泉区の次代を担う人材となるよう育てていくことも、まちづくりの上で重要な取り組みです。

●人と人との交流による活気の創出

- ・住宅都市という特性を持つ泉区では、区民の力を泉区の魅力と活力づくりへと繋げることが必要です。そのため、文化活動やまちづくり活動、コミュニティ活動などの様々な区民活動や商業・農業などの産業活動において、区民の交流による活気や活力の創出を図る取り組み、支援が求められています。